

# 学習障害及びその周辺児をもつ母親の育児不安とその影響要因に関する研究

伊藤 斉子<sup>1,2</sup>・川崎 千里<sup>3</sup>・土田 玲子<sup>1</sup>・高原 朗子<sup>4</sup>・吉玉 桂子<sup>5</sup>

**要 旨** 学習障害（LD）及びその周辺児をもつ母親の育児不安とその影響要因を検討するために、牧野の育児不安尺度を用いてLD児親の会の母親57名を対象にアンケート調査を実施した。その結果、1. 母親は育児困難感や疲労感を感じながらも自分一人で育児をしているという圧迫感はあまりなく、約9割が育児によって自分が成長していると感じられるというポジティブな意識が特徴にみられた。2. 育児不安は、①母親からみた夫の育児責任や②育児参加、③母親の趣味に費やす時間及び④育児相談相手（人数）と有意な関連がみられた。3.したがってこれらの因子が母親の育児不安の軽減要因となる可能性が示唆された。

長崎大医療技短大紀 13: 109-120, 1999

**Key Words** : 学習障害, 注意欠陥多動障害, 高機能自閉症, 育児不安, 精神保健

## はじめに

発達障害に対する作業療法の臨床場面において、母親に心配ごとや不安がある場合、子どもの情緒に影響を与えたり、逆に子どもの育てにくさが母親の育児に対する意欲や自信を低下させているように考えられるケースをよく経験する。このように発達障害の臨床において、子どもの心理適応には、環境要因としての母親の情動が母子相互に大きな影響を及ぼしあっていることが推察される。

鯨岡<sup>1)2)</sup>は、子どもの発達について従来の個体発達論よりもむしろ関係発達論を強調し、母子関係とりわけ情動のコミュニケーションの重要性を指摘している。このような視点から間主観的アプローチによる臨床も報告されている<sup>1)-4)</sup>。

ゆえに発達障害の臨床には、特に子どもの心理適応を図るために、母親の情動的側面や母親への作業療法援助の方法を検討する意義が大きいと考えられる。

これまで母親の情動について、不安や育児不安に関する先行研究は、褥婦<sup>5)</sup>や健常の乳幼児をもつ母親について母性衛生や母子保健の見地からの報告が多い<sup>6)-12)</sup>。また低出生体重児をもつ母親の育児不安に関する報告<sup>13)</sup>がある。障害児をもつ母親の育児不安や不安については、身体障害<sup>14)</sup>、障害児をかかえる双子家庭<sup>15)</sup>、ダウン症<sup>16)</sup>についてのみ報告があるが小児保健・小児看護領域のものであり、作業療法領域では報告がみられない。

また学習障害（LD）、注意欠陥多動障害（ADHD）、高機能自閉症などの子どもをもつ母親の育児不安につい

ては、先行研究はみられない。

そこで本研究は、LD及びその周辺児をもつ母親の育児不安とその影響要因について検討するために、以下の3点を目的として計画された。

1. LD 及びその周辺児をもつ母親のつぎの（1）－（4）について調査する。
  - （1）母親の年齢及び職業
  - （2）家族関係
  - （3）母親の主観的充実感や趣味の程度
  - （4）母親の社会活動と社会関係
2. LD 及びその周辺児をもつ母親の育児不安の特徴を明らかにする。
3. LD 及びその周辺児をもつ母親の育児不安は、母親の生活のうち上記（1）－（4）のうちどの因子と関連があるのかを検討する。

## 対 象

本研究の対象は、長崎 LD 児親の会の行事開催時に参加した母親57名であった。

## 方 法

### 1. アンケート調査

アンケートは、（1）母親の年齢及び職業、（2）家族関係、（3）母親の主観的充実感や趣味の程度、（4）母親の社会活動と社会関係、及び自由記述も含めて32項目からなる調査項目を作成した。

1 長崎大学医療技術短期大学部  
2 長崎大学大学院教育学研究科  
3 佐世保市子ども発達センター  
4 長崎大学教育学部  
5 上戸町病院

乳幼児を対象とした報告<sup>17)</sup>では、育児不安の程度に関連する要因は夫婦関係、母親の社会的な人間関係、趣味をもつことであった。そこでアンケート調査項目にはこれらの項目とともに、LD 及びその周辺児をもつ母親の育児不安に関連が予想される因子として、夫の年齢、子どもの障害名、障害をもつ子どもの出生順位、障害をもつ子どもの発達支援機関への通所頻度及びその所要時間などを加えた。自由記述内容は病院、医療機関、社会福祉などに対する希望、アンケートに関する意見、氏名の記入を加えた。

## 2. 育児不安の測定

育児不安のアセスメント方法に関する最近の知見は、育児困難感のプロフィール評定質問紙<sup>12)</sup>がある。また State-Trait Anxiety Inventory (STAI) による一般的な不安を測定するための尺度も報告されている<sup>18)</sup>。牧野<sup>17)</sup>は育児不安の問題が産業疲労の測定のために考案された蓄積的疲労徴候<sup>19)</sup>の問題と共通するところが多いとして、育児不安尺度を作成している。牧野は育児不安を、育児行為のなかで無力感や疲労感、育児意欲の低下などの生理現象を伴っている期間持続している情緒の状態と捉えている。

本研究においては、人間作業モデル<sup>20)</sup>の視点から、母親の育児を育児という役割を遂行する母親の仕事ととらえ、牧野<sup>17)</sup>による育児不安尺度による方法を用いた(表1)。

この尺度は、育児に関する不安徴候として、Ⅰ一般的疲労感、Ⅱ一般的気力の低下、Ⅲイライラの状態、Ⅳ育児不安徴候、およびⅤ育児意欲の低下の5つの特性、14項目か

らなる。これらの項目は育児期の母親が生活感情や意識を表明したことばを新聞の投書、乳幼児学級などでの発言などから収集分類し、上記の特性に対応する表現を探す作業を行い、最終的に採用されたものである。育児に関連した直接的な質問となっている。14項目はネガティブとポジティブな項目が混合しており、「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「全くない」の4段階で評定するように作成され、14項目の合計得点が多いほど不安度が高く、少ないほど不安度が低く育児への自信や満足感を示すことになる(最高56点、最低14点)。乳幼児をもつ母親364名の調査では、合計点のヒストグラムがほぼ正規分布を示し項目分析からも各14項目はいずれも育児不安の測定尺度として有効であることが確かめられている<sup>17)</sup>。

## 3. 調査方法

作成したアンケート及び育児不安尺度は、LD 児親の会が主催する行事開催時に受付で、参加した母親全員57名に手渡しで配布された。回答は、子どもが学生ボランティアと活動している半日の間にしてもらい、行事終了と同時にアンケートを回収した。アンケート回収は49名(86.0%)であった。

## 4. 分析方法

得られた結果は、統計パッケージ BMDP<sup>21)</sup>を用いて分析した。各項目のヒストグラムを BMDP2D、育児不安と各因子との関連を BMDP6D で Pearson の相関分析にて検討した。また自由記述回答内容は KJ 法<sup>22)</sup>を用いて分類した。

表1. 育児不安尺度

この頃、あなたは次のようにお感じになることがありますか。 あてはまるものを○で囲ってください。	
Ⅰ 一般的疲労感	
1. 毎日くたくたに疲れる (N).	よくある(4)・時々ある(3)・あまりない(2)・全くない(1)
2. 朝、目覚めがさわやかである (P).	よくある(1)・時々ある(2)・あまりない(3)・全くない(4)
Ⅱ 一般的気力の低下	
3. 考えごとがおっくうでいやになる (N).	よくある(4)・時々ある(3)・あまりない(2)・全くない(1)
4. 毎日はりつめた緊張感がある (P).	よくある(1)・時々ある(2)・あまりない(3)・全くない(4)
Ⅲ イライラの状態	
5. 生活の中にゆとりを感じる (P).	よくある(1)・時々ある(2)・あまりない(3)・全くない(4)
6. 子どもがわずらわしくて、イライラしてしまう (N).	よくある(4)・時々ある(3)・あまりない(2)・全くない(1)
Ⅳ 育児不安徴候	
7. 自分は子どもをうまく育てていると思う (P).	よくある(1)・時々ある(2)・あまりない(3)・全くない(4)
8. 子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある (N).	よくある(4)・時々ある(3)・あまりない(2)・全くない(1)
9. 子どもは結構一人で育っていくものだと思う (P).	よくある(1)・時々ある(2)・あまりない(3)・全くない(4)
10. 子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない (N).	よくある(4)・時々ある(3)・あまりない(2)・全くない(1)
Ⅴ 育児意欲の低下	
11. 自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう (N).	よくある(4)・時々ある(3)・あまりない(2)・全くない(1)
12. 育児によって自分が成長していると感じられる (P).	よくある(1)・時々ある(2)・あまりない(3)・全くない(4)
13. 毎日毎日、同じことの繰り返ししか、していないと思う (N).	よくある(4)・時々ある(3)・あまりない(2)・全くない(1)
14. 子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う (N).	よくある(4)・時々ある(3)・あまりない(2)・全くない(1)

N: ネガティブな意識 P: ポジティブな意識

## 結 果

### 1. LD およびその周辺児をもつ母親へのアンケート調査結果 (1) 母親の年齢及び職業 (表2-6)

母親の年齢分布は35-39歳が最も多く、ついで40-44歳台が多い。35-44歳までの母親が61.2%を占めた。職業の内訳は職業に就いていないものが55.1%と半数以上を占め、就業者の就業内容の内訳はパートタイム16.3%、ついでフルタイム12.3%であった。就業者の1週間に働く日数は5日間で38.1%と最も多く、1日に働く時間は3時間が28.6%で最も多かった。職業をもつことで育児

に困ったことは「仕事と家事で時間に追われて子どもに十分に相手をしてやれない」が28.6%と最も多く、「時間にゆとりがなく子どもを叱ったり、当たり散らすこともある」や「子どものいじめの徴候に気づくのに遅れるのでは」という不安を示した回答もみられた。現在就業していないものの以前の就業率は83.9%も占め、その退職の理由として結婚と育児で96.2%とほとんどを占めた。

### (2) 家族関係

#### 1) 家族形態 (表7)

核家族世帯が77.6%と著しく多く、ついで拡大家族(夫両親と同居) 16.3%であった。

表2. 対象者の年齢分布

年齢(歳)	人数(名)	割合(%)
25-29	2	4.1
30-34	9	18.4
35-39	17	34.7
40-44	13	26.5
45-49	6	12.2
不明	2	4.1
計	49	100.0

表3. 対象者の職業の内訳

内 訳	人数(名)	割合(%)
職業に就いていない	27	55.1
パートタイムの仕事	8	16.3
フルタイムの仕事	6	12.3
アルバイト・内職	2	4.1
家業(自営業など)	4	8.2
その他	1	2.0
不明	1	2.0
計	49	100.0

表4. 就業者の週に働く日数

項目	人数(名)	割合(%)
3日	4	19.1
4日	2	9.5
5日	8	38.1
6日	5	23.8
7日	2	9.5
計	21	100.0

表5. 就業者の1日に働く時間

項目	人数(名)	割合(%)
2時間	1	4.8
3時間	6	28.6
4時間	2	9.5
5時間	2	9.5
6時間	3	14.3
7時間	2	9.5
8時間	4	19.0
9時間	1	4.8
計	21	100.0

表6. 職業をもつことで育児に困ったこと

項目	記入数(個)	割合(%)
子どもの保育所の迎えや、学校から帰るまでに仕事場から戻っておいてやりたいが時間に制約される。	3	21.5
仕事と家事で時間に追われて、子どもに十分に相手をしてやれない。	4	28.6
時間にゆとりがないと子どもに叱ることがある。あたることも。	2	14.3
子どもが休みや病気のとき家に居てやれない。	2	14.3
親の会に参加する時間がとれない。	1	7.1
子どもたちに寂しい思いをさせたかもしれないがその分愛情を注いだつもり。	1	7.1
仕事に就いて家を空けることで、子どものいじめの徴候に気づくのが遅れるのではと不安です。	1	7.1
計	14	100.0

注：就業者 21 名のうち、回答者 12 名(回答率 57.1%)。

表7. 家族形態

項 目	人数 (名)	割合 (%)
核家族	38	77.6
拡大家族 (夫方)	8	16.3
拡大家族 (妻方)	2	4.1
母子家庭	1	2.0
計	49	100.0

## 2) 対象者の子ども (表8-13)

子どもが何らかの障害があると専門機関で診断されてからの年数は、最も多いのは6年で14.2%を占めた。子どもの年齢は平均9.2 (標準偏差: 2.6) 歳と学童期にあった。母親の記述による子どもの診断名はLDが47.0%と約半数を占め、ADHDが12.3%、自閉傾向と自閉症をあわせて10.2%であった。対象者の子どもの数は、2人が59.2%で最も多く、ついで3人が28.6%を占めた。障害をもつ子どもの出生順位は第一子が55.1%と半数以上を占め、ついで第二子が28.6%であった。地域の発達支

表8. 子どもが診断を受けてからの年数

項目	人数 (名)	割合 (%)
1 年	2	4.8
2 年	5	10.2
3 年	4	8.1
4 年	5	10.2
5 年	5	10.2
6 年	7	14.2
7 年	4	8.1
8 年	3	6.1
9 年	1	2.0
不明	13	26.1
計	49	100.0

表9. 母親の記述による子どもの診断名

項目	人数 (名)	割合 (%)
学習障害	23	47.0
注意欠陥多動障害	6	12.3
自閉傾向	3	6.1
自閉症	2	4.1
学習障害と自閉症	2	4.1
自閉傾向のある精神遅滞	1	2.0
精神遅滞	1	2.0
てんかん	1	2.0
感覚障害	1	2.0
言語障害	1	2.0
不明	8	16.4
計	49	100.0

援機関に通所する頻度は5週間に1回が28.6%と最も多かったが、通所していないものも18.4%であった。その所要時間は、30-60分が42.9%を占めた。

表10. 対象者の子どもの数

項目	人数 (名)	割合 (%)
1 人	4	8.2
2 人	29	59.2
3 人	14	28.6
4 人	1	2.0
5 人	0	0
6 人	1	2.0
計	49	100.0

表11. 障害をもつ子どもの出生順位

項目	人数 (名)	割合 (%)
第1子	27	55.1
第2子	14	28.6
第3子	3	6.1
第4子	2	4.1
不明	3	6.1
計	49	100.0

表12. 地域の発達支援機関に通所する頻度

項 目	人数 (名)	割合 (%)
通所していない	9	18.4
1週間に1回	2	4.1
2週間に1回	5	10.2
5週間に1回	14	28.6
8週間に1回	1	2.0
10週間に1回	1	2.0
24週間に1回	1	2.0
60週間に1回	5	10.2
不明	11	22.5
計	49	100.0

表13. 自宅から地域の発達支援機関までの所要時間

項 目	人数 (名)	割合 (%)
30分以内	11	22.4
30-60分	21	42.9
60-120分	12	24.5
120分以上	5	10.2
計	49	100.0

### 3) 夫との関係 (表14-18)

夫の年齢分布は40-44歳が34.7%を占め、ついで35-39歳が22.5%を占めた。母親からみた夫の育児責任「夫が子育てに責任を持っていないと思う」は、「時々ある」が32.7%、「よくある」が14.3%で併せて47%と約半数を占めた。母親からみた夫の子育て参加母親が「夫と一緒に子育てをしてくれていると思う」は「まあ、そう思う」が42.9%、「非常にそう思う」24.5%と併せて67.4%を占めた。夫との会話時間は1時間程度が最も多く28.6%を占め、ついで2時間程度であった。夫が普段1日に子どもと遊ぶ時間は「普段は遊ばない(休日のみ)」が最も多く28.7%を占め、ついで30分が多かった。

#### (3) 母親の生活に対する主観的充実感や趣味の程度

##### 1) 母親の主観的充実感 (表19)

母親が主観的に「1日の中で充実感を感じる時」について選択した項目数は8項目中、最も多かったのは2個で28.7%を占め、ついで1個20.4%が多かった。そ

表14. 対象者の夫の年齢分布

年齢(歳)	人数(名)	割合(%)
30-34	2	4.1
35-39	11	22.5
40-44	17	34.7
45-49	6	12.2
50-54	1	2.0
不明	12	24.5
計	49	100.0

表15. 夫は子育てに責任をもっていないと思う

項目	人数(名)	割合(%)
よくある	7	14.3
時々ある	16	32.7
ほとんどない	16	32.7
全くない	9	18.3
不明	1	2.0
計	49	100.0

表16. 夫と一緒に子育てをしてくれていると思う

項目	人数(名)	割合(%)
非常にそう思う	12	24.5
まあ、そう思う	21	42.9
あまりそう思わない	11	22.4
全くそう思わない	4	8.2
不明	1	2.0
計	49	100.0

の選択内容のうち、最も多かったのは趣味を楽しんでいるとき22.2%、ついで友人・知人と話をしているとき20.8%、子どもと家で遊んでいるとき20.0%であった。

##### 2) 趣味に費やす時間 (表20)

「自分の趣味のために1週間のうち、多少とも時間をさいていますか」に対しては、59.1%が「はい」と回答し、「はい」と回答したもののうち趣味にさく時間は、1週間のうち2時間以内が34.7%と最も多かった。

##### (4) 母親の社会活動と社会関係 (表21-26)

立ち話をする程度以上の近所づきあいの軒数は1-2軒及び3-4軒が最も多く、それぞれ30.6%を占め併せて61.2%であった。同じくらいの年齢の子どもをもつ近所の母親とのつきあいの程度は、「子ども同士遊びに行ったり来たりする」が34.7%で最も多く、ついで「会えば挨拶をする程度」24.5%であった。家族以外の人で普段1日のうち子どものことを話す機会のある人数は、「3-4人」が34.7%と最も多いが、「2人ぐらゐ」と「1人以下」併せて51.0%であった。その種類は1種類が42.9%と最も多く、その相手は近所の人34.2%、友人が27.8%であった。活動や学習などのために外に出る頻度は「よくある」42.9%、「時々ある」44.9%で併せて約9割を占めた。自分の意見を家族以外の人に対して述べたり書いたりする機会は、「よくある」32.7%、「時々ある」46.9%で約8割を占めた。

表17. 普段1日の夫との会話時間

項目	人数(名)	割合(%)
10分程度	2	4.1
30分程度	4	8.1
1時間程度	14	28.6
2時間程度	10	20.4
3時間以上	3	6.1
わからない	7	14.3
不明	9	18.4
計	49	100.0

表18. 普段1日に夫が子どもと遊ぶ時間

項目	人数(名)	割合(%)
遊ばない	14	28.7
1分	1	2.0
5分	2	4.1
10分	3	6.1
20分	1	2.0
30分	10	20.4
1時間	7	14.3
2時間	2	4.1
4時間	1	2.0
不明	8	16.3
計	49	100.0

表19. 1日の中で充実感を感じる時（内容）

項目	のべ個数（個）	割合（％）
特に充実しているときはない	3	2.2
朝目覚めたとき	5	3.7
家事をしているとき	9	6.7
子どもと家で遊んでいるとき	27	20.0
趣味を楽しんでいるとき	30	22.2
夫と話をしているとき	13	9.6
友人・知人と話をしているとき	28	20.8
子どもの世話をしているとき	9	6.7
収入になる仕事をしているとき	7	5.2
その他（夜ふとんに入って寝るとき）	2	1.5
その他（子どもが寝たとき）	1	0.7
その他（心配事がなく、夫のやさしさを感じたとき）	1	0.7
計	135	100.0

表20. 自分の趣味のために1週間のうち費やす時間

項目	人数（名）	割合（％）
0時間	20	40.9
2時間以内	17	34.7
3－4時間	6	12.2
5時間以上	6	12.2
計	49	100.0

表21. 立ち話をする程度以上の近所づきあいの軒数

項目	人数（名）	割合（％）
全然ない	5	10.2
1－2軒	15	30.6
3－4軒	15	30.6
5－10軒	8	16.3
11軒以上	4	8.2
不明	2	4.1
計	49	100.0

## (4) その他

1) 病院, 医療機関, 社会福祉に対する希望（自由記述）  
（表27）

回答内容は3つに大別された。一つは、医療や福祉機関のソフト及びハード両面の充実と増設を願っているもので、全回答34個のうち19個（55.9％）を占めた。二つめは、家族に対するカウンセリングの充実や継続を希望したものが全回答34個のうち12個（35.3％）であった。さらに三つめは、地域社会や学校、国の障害児に対する意識の変革を希望したものが3個（8.8％）であった。

このような3つの内容から、LD及びその周辺児を取りまく医療、福祉、及び教育の環境が、母親にとっては気軽に相談できる状態にはない傾向が明らかになった。特に、就学後も継続して利用できる機関の増設を希望する回答が35.3％と最も多かった。

## 2) アンケートに対する意見（自由記述）

「少しのゆとり、少しの手助けで随分と前向きに明るく育児に取り組めると思うが本当のところは毎日くたくたである。」や「子育て以外にやりたいことは多くあるが時間と心に余裕がないと十分に楽しめないのも子どもが成長してからにしたい。」「子どもと共通の趣味をもちたい。」というものがあつた。

表22. 同年齢の子どもをもつ近所の母親とのつきあいの程度

項目	人数（名）	割合（％）
会えば挨拶をする程度	12	24.5
立ち話をしたり公園などに一緒に子どもを連れていく	7	14.3
子どもどうし遊びに行ったり来たりする	17	34.7
子どもを数時間あずかったりあずけたりする	7	14.3
子どもが泊まりに行ったり来たりする	4	8.1
不明	2	4.1
計	49	100.0

表23. 家族以外の人で普段1日のうち子どものことを話す機会のある人数

項目	人数(名)	割合(%)
1人以下	10	20.4
2人ぐらい	15	30.6
3-4人	17	34.7
5人以上	6	12.3
不明	1	2.0
計	49	100.0

表24. 子どものことについて話す相手

項目	のべ個数(個)	割合(%)
祖母	12	15.2
祖父	4	5.1
近所の人	27	34.2
保母・幼稚園教諭	13	16.5
友 人	22	27.8
職場の同僚	9	1.4
その他(友人)	10	12.7
その他(幼稚園の父兄)	2	2.5
その他(親の会)	1	1.2
その他(妹)	1	1.2
計	79	100.0

表25. 社会活動や学習などのために外に出る頻度

項目	人数(名)	割合(%)
よくある	21	42.9
時々ある	22	44.9
あまりない	5	10.2
ほとんどない	1	2.0
計	49	100.0

表26. 自分の意見を述べたり書いたりする機会

項目	人数(名)	割合(%)
よくある	16	32.7
時々ある	23	46.9
あまりない	7	14.3
ほとんどない	3	6.1
計	49	100.0

表27. 病院、医療機関、社会福祉に対する希望

項目	記入数(個)	割合(%)
Ⅰ 医療や福祉機関のソフト及びハード両面の充実と増設を希望した内容		
専門家を多く配置しており気楽に安心して相談でき、就学後も利用できる医療機関、療育機関、福祉機関などセンターの増設。	12	35.3
病院はもっとLD及びその周辺障害を理解して対応してほしい。	3	8.8
医療機関・教育機関・福祉機関は連系してサポートしてほしい。	2	5.9
何度も医療機関を受診し検査をしたのにLDの診断が遅れた。もっと早く何か手だてをしてほしかった(早期発見と早期療育)。	2	5.9
小計	19	55.9
Ⅱ 家族に対するカウンセリングの充実や継続を希望した内容		
家族に対するカウンセリングを充実・継続してほしい。	6	17.7
進学や就職など子どもの将来に不安を感じる。	2	5.9
LDを知らずに悩んでいる親は多くいると思う。相談に来るのを待つだけではなく地域や学校の教員に啓蒙活動をしてほしい。	2	5.9
記録の開示。	1	2.9
専門家から知識教養を受けたい。	1	2.9
小計	12	35.3
Ⅲ 地域社会や学校、国の障害児に対する意識の変革を希望した内容		
地域的な福祉のあり方に疑問、不満はある。ハンディのある子どもの親として世間の特別視した扱いには理解できない。一人の人間として社会で生きていけるような環境を願う。	2	5.9
国がLD児を認めてほしい。	1	2.9
小計	3	8.8
総計	34	100.0

注：回答者数は、対象者49名のうち29名(回答率59.2%)。

## 3) 氏名記入の有無

氏名の記入されたものが14名(28.6%)であった。

## 2. LDおよびその周辺児をもつ母親の育児不安の傾向

## (1) LDおよびその周辺児をもつ母親の育児不安尺度のヒストグラム(図1)

平均35.8 (SD: 5.4) 点, 中央値 (Mn) 36.0 (Q: 4.3) 点, 最大値47, 最小値26で, ほぼ正規分布を示した。

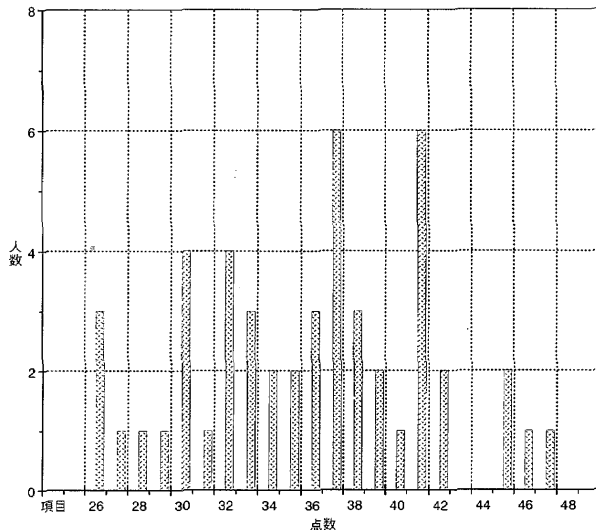


図1. 学習障害及びその周辺児をもつ母親の育児不安尺度のヒストグラム

## (2) LDおよびその周辺児をもつ母親の育児不安の特徴(図2)

「よくある・時々ある」及び「ほとんどない・全くない」を合わせて, 回答率が高いものから順に5位までを示すと次のようになった。①育児によって自分が成長していると感じられる(91.8%), ②子どものことでどうしたらよいかわからなくなる(87.8%), ③自分は子どもをうまく育てていると思わない(75.5%), ④毎日ぐたぐたに疲れる(71.9%), ⑤自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまうことはない(69.4%), であった。尚, 「ほとんどない」及び「全くない」が該当する場合は, 表現を逆転させて修正して示した。

## 3. LD およびその周辺児をもつ母親の育児不安とアンケート質問項目との関連について(表28)

育児不安と有意な関連がみられたのは, 次の4項目であった。それは, 1. 「夫は子育てに責任をもっていないと思う」(正), 2. 「夫と一緒に子育てをしてきている」(負), 3. 1週間のうち趣味に費やす時間(負), 及び4. 1日のうち家族以外で子どもについて話す機会がある人数(負)であった。ほかの項目とは, 有意な関連が認められなかった。

## 考 察

## 1. LD 及びその周辺障害をもつ母親の育児不安の特徴について

図2の育児不安尺度の各項目別の回答状況から示され

図2. 学習障害及びその周辺児をもつ母親の育児不安の特徴

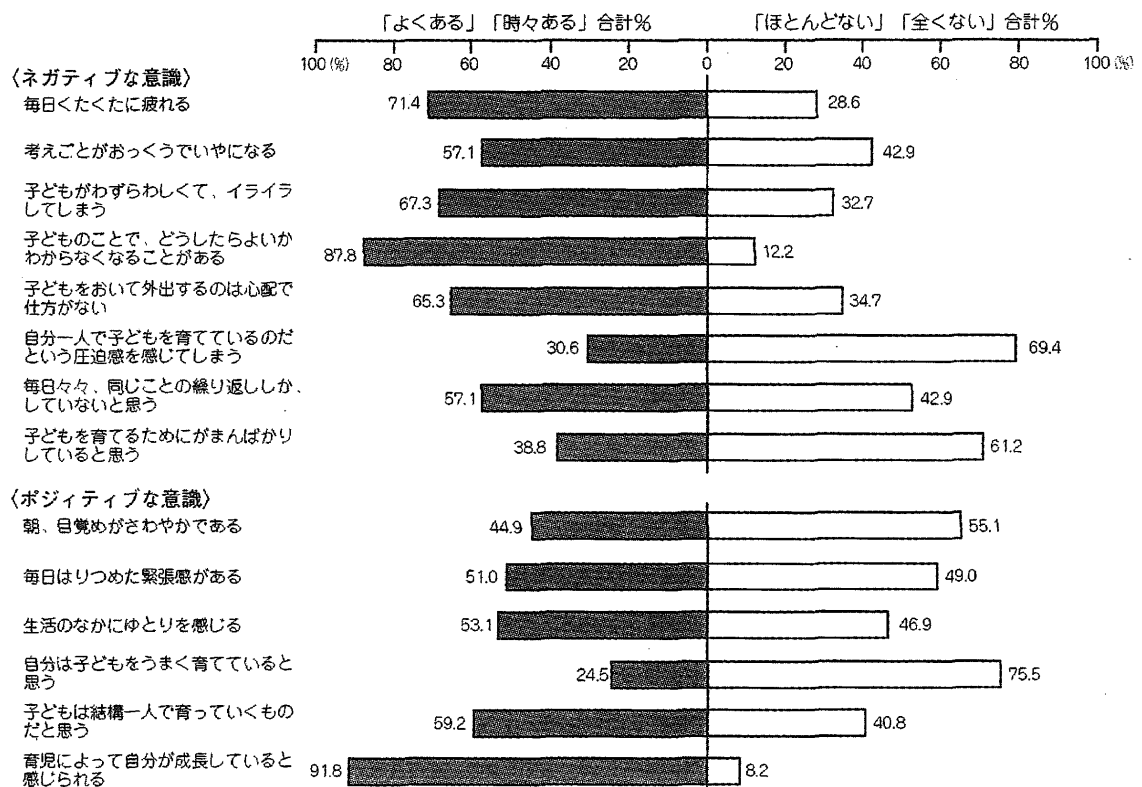


表28. 学習障害及びその周辺児をもつ母親の育児不安尺度とアンケート項目との相関行列

項目	相関係数
Ⅰ. 母親の年齢及び職業	
母親の年齢	-.187
就職の有無	-.014
就業者の週に働く日数	.069
就業者の1日に働く時間	-.329
以前の就業の有無	-.059
Ⅱ. 家族関係	
家族形態	.184
夫の年齢	-.278
子どもが診断を受けてからの年数	-.153
母親の記述による子どもの診断名	.165
子どもの数	-.141
障害をもつ子どもの出生順位	-.213
地域の発達支援機関への通所頻度	-.044
自宅から地域の発達支援機関までの所要時間	.127
夫は子育てに責任をもっていないと思う	.334* (p=.020)
夫と一緒に子育てをしてくれていると思う	-.312* (p=.031)
普段1日の夫との会話時間	-.199
普段1日に夫が子どもと遊ぶ時間	-.255
Ⅲ. 母親の主観的充実感、趣味の程度	
1日の中で充実感を感じる時	-.254
自分の趣味のために、1週間のうちさく時間の有無	-.127
1週間のうち趣味に費やす時間	-.493** (p=.007)
Ⅳ. 母親の社会活動と社会関係	
立ち話をする程度以上の近所づきあいの軒数	-.209
同年齢の子どもをもつ近所の母親とのつきあいの程度	-.124
家族以外の人で普段1日のうち子どものことを話す機会のある人数	-.413** (p=.003)
子どものことについて話す相手の種類	-.016
社会活動や学習などのために外に出る頻度	-.246
自分の意見を述べたり書いたりする機会	-.231
アンケートに対する記入の有無	-.107

\* :  $p < 0.05$ , \*\* :  $p < 0.01$

るように、LD児及びその周辺児をもつ母親は育児困難感、疲労感を感じながらも、自分一人で子どもを育てている圧迫感はありません、育児によって自分が成長していると感じられるというポジティブな意識が特徴にみられることが明らかになった。

これは、母親がLD児親の会の活動を通して学び合い、支え合っていることによる可能性が考えられる。

## 2. LD 及びその周辺障害をもつ母親の育児不安とアンケート項目との関連について

育児不安尺度とアンケート項目との相関行列（表28）から、LD 及びその周辺障害をもつ母親の育児不安は、母親が「夫は子育てに責任をもっていないと思う」と感じられるほど不安度は高くなること、母親が「夫と一緒に子育てをしてくれている」と感じられること、また1週間のうち趣味に費やす時間があること、さらに1日のうち家族以外で子どもについて話す機会がある人数が多い程、不安度は低くなることが示唆された。これらの結果は牧野の報告<sup>16)</sup>と同様のものであった。

したがって、LD 児及びその周辺児をもつ母親の育児

不安について、母親からみた夫の育児責任や育児参加、趣味に費やす時間、家族以外の人で子どものことを話す機会のある人数が、育児不安を軽減する要因となりうる可能性が示唆された。

### （1）育児不安と母親からみた夫の育児責任及び育児参加との関連

本研究の結果、母親の育児不安は実際に、夫が母親（妻）と話す時間や、子どもと遊ぶ時間と有意な関連はみられなかったが、母親からみた夫の育児責任や育児参加に関連がみられた。このように、母親の夫への育児に関する信頼感が母親の育児不安に影響を及ぼす要因となりうる可能性が示唆された。

したがって作業療法士として、LD 及びその周辺児の臨床に携わる際は、母親への支援と同時に、子どもの面接や療育場面への夫婦同伴での参加など父親も考慮した発達支援、家族支援のあり方が望ましいと考えられる。

### （2）育児不安と趣味に費やす時間との関連

横山<sup>14)</sup>の障害児をかかえる双子家庭の母親の疲労状態に関する報告においては、趣味を含めたストレス解消法

のある母親の方がいない母親に比べて有意に疲労状態が低かった結果を報告している。牧野<sup>16)</sup>や中津<sup>10)</sup>においても趣味が育児不安を軽減することを示唆している。本研究においても一週間のうち趣味にさく時間が多いほど育児不安が低い結果が得られ、これらと同様の結果であった。

また表19に示すように1日の中で充実感を感じるときは趣味を楽しんでいるときが最も多く、つぎに友人と話をしているときが多かった。

人間作業モデルによれば、成人期における遊びやレクリエーションは一時的な若返りの場を提供することによって勤労者としての役割を支えるとしている<sup>20)</sup>。したがって、母親が趣味に時間を費し趣味を習慣化することが、育児という役割を支え母親の育児不安を軽減する因子となりうることを示唆された。

このことから、学童期のLD及びその周辺児をもつ母親支援には、趣味について「時間と心に余裕がないと充分に楽しめないので子どもが成長してからにしたい」という意見もあるが、育児に時間がとられても尚、「子どもと共通の趣味をもつ」など積極的に趣味に取り組み、子ども以外のことにも目を向けるようストレス解消を促すように援助することが重要であると考ええる。

### (3) 育児不安と家族以外で子どもについて話す機会のある人数(育児相談相手)との関連

本研究の結果、母親の育児不安は1日のうち家族以外で子どもについて話す機会がある人数と有意な関連がみられた。これは、牧野<sup>20)</sup>や中津<sup>13)</sup>の報告と同様であった。

したがって母親の対人関係の広さが、母親の育児不安を軽減しうる因子となることが示唆された。

しかし一方では、その相談相手は近所の人や友人が62%を占め、相談相手の人数は2人以下が51%を占め、母親は表29に示すように気軽に相談できる専門家の充実をも望んでいた。これは、富安<sup>10)</sup>の障害児をもつ母親相互の相談が多く医療スタッフへの相談が少ないという報告と同様の結果といえるのではないだろうか。

したがって、LD及びその周辺児をもつ母親の育児不安の軽減や母親支援には、親の会などの主体的な自助グループの育成が重要な役割をもつことが示唆された。加えて、専門家に気楽に相談できるような医療・保健・教育・福祉のシステムづくりも必要であると考えられる。

## 結 語

1. LD及びその周辺児をもつ母親の育児不安の特徴は、育児困難感、疲労感を感じながらも、自分一人で子どもを育てているという圧迫感はあまりなく、その9割が育児によって自分が成長していると感じられるというポジティブな意識が特徴にみられることが明らかになった。
2. LD及びその周辺児をもつ母親の育児不安と有意に関連のみられた項目は、母親からみた夫の育児責任と育児参加、母親の趣味に費やす時間、家族以外の人で

子どものことを話す機会のある人数であった。

3. したがって、これらの因子がLD及びその周辺児をもつ母親の育児不安を軽減する要因となりうる可能性が示唆された。

## 謝 辞

統計処理に専門的なご助言を頂きました長崎大学環境科学部教授中村剛先生に感謝申し上げます。また資料収集にご協力頂いた長崎LD児親の会「のこのこ」のお母様方、本学作業療法学科第9回卒業生田中博憲氏にお礼申し上げます。

## 引用文献

1. 鯨岡峻：発達関係論の構築－間主観的アプローチによる。ミネルヴァ書房，京都，1999.
2. 鯨岡峻：両義性の発達心理学－養育・保育・障害児教育と原初的コミュニケーション。ミネルヴァ書房，京都，1998.
3. 小林隆児：自閉症の情動的コミュニケーションに対する治療的介入－関係性の障害の視点から－。児童青年精神医学とその近接領域，37：319-330，1996.
4. 小林隆児：母子の関係障害からみた母親の役割－発達障害の臨床から－。発達，57：27-34，1994.
5. 桜井理恵，佐藤祥子，佐藤喜根子：褥婦の入院期間の長短別不安要因の分析。東北大学医療技術短期大学部紀要，7：93-100，1998.
6. 綿貫恵美子：月齢1カ月の乳児を抱える母親の育児不安に関する一考察。母性衛生，38：227-232，1997.
7. 塚原洋子：保健領域からの育児不安への対応。乳幼児健診の場面を中心にして。東京小児科医学会報，16：23-27，1998.
8. 千葉良：母の育児不安と子どもの気質－乳幼児健診での対応－。東京小児科医学会報，15：19-23，1997.
9. 千葉良：母の心配ごとと育児不安の関係について。仙台赤十字病院医学雑誌，5：19-31，1996.
10. 中津郁子，高梨一彦，佐々木保：幼稚園生活における幼児の不安感情に関する研究－(第2報) 母親の育児不安との関連について－。小児保健研究55：530-536，1996.
11. 藤原千恵子，石原あや，永島すえみ，渡部淳子，徳留由紀子：入院する乳幼児をもつ両親の不安に関する研究。小児保健研究，57：817-824，1998.
12. 川井尚，庄司順一，千賀悠子，加藤博仁，中村敬，谷口和加子，恒次欽也，安藤朗子：育児不安に関する臨床的研究(V)－育児困難感のプロフィール評定質問紙の作成－。日本こども家庭総合研究所紀要，35：109-143，1999.
13. 本城秀次，水野里恵，鈴木妙子，田中詩乃，阿喰みよ子，永田雅子，五島弓枝，西出隆紀，側島久典，岸真司，安藤恒三郎：低出生体重児の気質的行動特徴と母親の育児不安。厚生省精神・神経疾患研究7年度研究報告。書児童・思春期における行動・情緒障害の病態解析及び治療に関する研究，83-88，1996.
14. 榛葉順子：障害児を抱えた母親の母子入園初期の特性について。母親の不安とその不安にかかわる要因。小児看護，22：487-493，1999.
15. 横山美江，口分田政夫，木内ゆかり，大矢紀明，清水忠彦：障害児をかかえる双子家庭の育児環境と母親の疲労状態。小児保健研究，58：603-609，1999.
16. 富安俊子，松尾壽子，穴井孝信：ダウン症児を育てている母親の不安と相談相手－育児体験調査からの検討－。母性衛生，39：346-350，1998.
17. 牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉。家庭教育研究所紀要，3：34-56，1982.
18. 水口公信，中里克治，下仲順子：STAI使用手引き，三京房，京都，1991.
19. 越河六郎：CFSI(蓄積的疲労徴候インデックス)の妥当性と信頼性。労働科学，67，145-157，1991.
20. Kielhofner, G 編著(山田孝・監訳)：人間作業モデル 理論と応用。協同医書出版社，東京，1990，pp26-30.
21. Dixon, W. J., Brown, M. B., Engleman, L. D., et al: BMDP Statistical Software. University of California Press, Los Angeles, 1990.
22. 川喜多二郎：発想法。中公新書，東京，1991.
23. Kielhofner, G, et al: A model of human occupation, Part 2., Ontogenesis from the perspective of temporal adaptation. Am J of Occup Ther, 34(10): 657-663, 1980.

A Study on Maternal Anxiety regarding Child-Rearing in mothers of Children with Learning Disabilities (LD) and Associated Dysfunctions and Primary Factors Contributing to The Maternal Anxiety.

Masako ITO<sup>1,3</sup>, Chisato KAWASAKI<sup>2</sup>, Reiko UCHIDA<sup>1</sup>,  
Akiko Takahara<sup>3</sup>, Keiko YOSHITAM<sup>4</sup>

1) The School of Allied Medical Science, Nagasaki University

2) Sasebo Center for Child Development

3) Faculty of Education, Nagasaki University

4) Kamito-machi hospital

**Abstract** The purpose of this paper is to show maternal anxiety regarding child-rearing in mothers of children with learning disabilities (LD) and associated dysfunctions, and to investigate the primary factors contributing to the maternal anxiety. Makino's assessment scale for maternal anxiety regarding child-rearing was used in selecting items of a survey which was given to 57 mothers in a LD parents group. The results 1) showed that although mothers felt difficulty and fatigue in child-rearing, there was almost no feeling of oppression at having to raise children all by themselves; A distinctive positive finding was that 90 % felt they were developing in their capacity for child-rearing. 2) suggested that the primary factors in reducing anxiety in mothers of children with LD and associated dysfunctions were that the mother saw her husband take some responsibility for child-rearing and contribute to the child's development, and that the mother could spend time on her own interests and had opportunities to talk with others about children.

Bull. Sch. Allied Med. Sci., Nagasaki Univ. 13: 109-120, 1999